

第四節 作戰計畫上の問題点

第一款 第一期会戦に於ける突破正面とイマンの分断

滿洲東正面に攻勢を執らんとする第一期会戦に於て其の突破正面を何れの地点に選定するかは作戰計畫上の重要問題であり時代により変遷した。

一九三三年乃至一九三五年の間に於ては綏芬河南北の正面を、一九三六年乃至一九四〇年の間に於ては東寧南北の正面を突破正面と予定した。

之等の正面が選定せられた理由は左の如きものであつた。

一 重車輛を有する軍主力を推進する道路は綏芬河—ウオロシロフ道及

東寧—ウオロシロフ道以外にはない。

二 地形が主力砲兵の展開に適する。

三 地形及交通網等の關係上ソ軍陣地に近接して平時作戰準備を行うことが可能である。

四、當時綏芬河、東寧間及東寧、輝春間に存在したソ軍陣地の間隙部六カは後この間隙に陣地を構築した一より有力なる兵団を使用するこ
とにより主力正面の開放を容易ならしめ得る。

日本軍はこの攻勢に適する如く交通網特に鉄道及自動車道を整備し且
国境陣地の構築、攻城砲兵の展開、其の他の作戦準備を実施した。一
九三九年頃東寧正面の国境陣地には二十四種榴弾砲一〇門、三十種榴
弾砲八門を主体とする攻城火力を国境陣地内に展開した。

一九四一年以降イマン地区分断による迂回効果を主力正面に直接利用
するため半截河附近に攻撃の重点を指向した。

以上記述した突破正面変遷の状況は附図第四の如くである。
イマン分断作戦に就ては東安—虎林鉄道建設せられ虎頭要塞整備せら
るるに及び一箇軍を虎林方面よりウスリー河を渡河してイマン方面に
進めソ軍を南北に分断せんとする構想を得たものである。之が作戦計
畫に具現したのは一九三八年以降で一九四〇年度作戦計畫に於ては果

五軍之に充當した。一九三七年の作戦計畫に於てはイマン分断の思想は一九三八年以降程明確ではないがこの方面に有力なる一兵団を進めることにより迂回効果を収めんとした。四

一註二五一イマン附近は樞東鉄道が最も近く満領に接近した地点で日本軍虎頭要塞の火制下にあつた。ソ軍はこの脅威から免れるために東方に迂回鉄道を建設し一九四二年頃に完成したようであつた。

日本軍がイマン附近を突破する為にはウスリー河、穆稜河、小穆稜河及この附近一帯の大濕地帯を通過するを要するところとなり現地軍は濕地帯通過の研究、訓練及準備に大方な努力を傾注した。

第二款 第二期会戦の予想戦場と西正面の持久作戦

第二期会戦が北正面、西正面の何れに生起するやは第一期会戦^{六九}終了^九後の日ソ兩軍の状況特にソ軍主力の進入方面に左右せられ、このソ軍の行動は季節によりても差異を生ずるものと判断せられ日本軍の作戦構想に於てはこの何れにも応じ得る如く考案せられていた。

大興安嶺^{合戦が北正面に生起する場合は第一}方面の持久作戦は第一期会戦の終始を通じ継続せらるるは勿論第二期間持久したければならぬこととをみる。

西正面持久の構想は年次により異なり日本軍常駐兵力の増加、第一期会戦に使用する兵力の変化、西正面築城施設の強化、交通網特に輸送力の増強、ソ軍の企図判断等に関連して変化した。之が変化の状況を持久地域に就て比較すれば下表の如くであつた。

年次	持 久 地 域
一九三三	大興安嶺の線、止むを得ざれば齊々哈爾周邊
一九三四	
一九三五	并渡河南北の線、止むを得ざるも札蘭屯以西
一九三六	
一九三七	海拉爾、并渡河間、止むを得ざるも興安以西の地区
一九三八	
一九三九	興安以西の廣大なる地域
一九四〇	

西正面に於ける日ソ兩軍の集中速度に就いて觀るに一九三四年頃には
 ては開戦二箇月後ソ軍九箇師団に対し日本軍四箇師団を使用し得るも
 のと判断せられ(二三頁)表参照)一九三七年頃には東正面の第一
 期会戦に決勝兵力を充當するが爲西正面に於てはソ軍一二箇師団に於

七〇

し日本軍僅かに二箇師団、一騎兵集團を充て得るに過ぎない状況であ
つた（三四頁B表参照）

かくて一九三七年度の作戦計畫に於ては西正面の持久作戦が著しく困
難性を加へ作戦指導上重大なる危機を招くこともあり得るものと予想
せられたので海拉爾築城の構想等を重視し施策するに至つた。而して
兵力の運用に於ては開戦二箇月後に滿洲に到着すべき東正面投入予定
の師団二乃至三箇を要すれば西正面に使用し大興安嶺の線を確保せし
むることあるべきを考慮せられた。

西正面持久作戦の成否は第一期会戦の成果、第一期会戦後の兵力転用
と第二期会戦の様相等全戦局に重大なる影響を與うることとなるので作
戦計畫立案上の一重要問題であつた。日本軍としては大興安嶺以西の
廣大なる地域に持久地域を求むることは當初より之を希望したところ
であつたが諸条件は容易に之を許さずして一九三九年頃より漸くこの
案を採用し得るに至つたものである。

第三款 作戦の終末線

一九三三年より一九三六年迄の作戦計畫は内線の利を發揮して遠かに先づ東正面の敵を各個に撃破したる後大小興安嶺方面に敵軍主力を撃破してバイカル湖以東の領域を占領するを以て作戦方針とした。

バイカル湖を以て作戦の終末線としたのは地形上長期持久を策するに適すること、敵ソに対し政略的威壓を與へること、日本及滿洲の安全を完うし得ること、内蒙、外蒙を日本の勢力範囲に收め得ること、特に日本軍の作戦力を考慮せられた結果である。

日本としてはソ連を武力的に屈服せしむるキメ手がなく何れの線を作戦終末線とするやば政略上の最高の決定事項であつた。

然るに一九三七年の作戦計畫に於ては主として日本の国力を基礎とする考慮上ルフロウ、大興安嶺の線を以て作戦の終末線と改められた。それはソ軍兵力の増大にも鑑み日本軍の作戦準備がホロンバイルの大高原を超えて更に西進するに足る程度に出来ていたこと及ホロンバ

イルは彼我兩軍にとり一大障碍で之を越えて進攻するものが必ずや不利なる熊勢に陥ることが理由とされた。即ち當時ホロンバイルの廣漠地は彼我作戦上の緩衝地帯とみるであらうと觀察されたのである。(註二六一) ホロンバイルが作戦上の大障碍であるという觀察は今日では改められねばならない。それは航空機、機甲部隊の発達特に第二次世界戦争に於て経験した自動車輸送の規模の擴大はその障碍力を減殺したものと考へる。

然しながら大興安嶺以東の地区に於て敵に打撃を與へたる後ルフロウ大興安嶺の線に停止して滿洲の爆撃圈内にあらしめることは好ましからざることであり當時の状況之を許せばバイカル湖の線まで進出したい希望は持たれていたのである。

第四款 季節の作戦に及ぼす影響

黒河附近に於ける気温は十二月、一月は平均零下二〇度、下り四〇度
 に達することも屢々あるので日本軍は固よりソ軍に於ても大兵団の運
 用は著しく制肘せられる。十一月、二月、三月は十二月、一月に比し
 て平均気温稍と高く冬期作戦の準備充分なる場合に於ては大兵団の作
 戦は不可能ではなない。四月は解氷期、十月は結氷期で月間約一〇日間
 は流水及薄氷の為渡河全く不可能である。四月から九月までの約六箇
 月間は作戦に適し黒龍江の渡河可能の時期である。
 結氷期開戦の場合ソ軍は主力を以て黒龍江を氷上渡河して北滿平地
 に向い進入し來ること多し予期しなればならぬ。それは西正面のソ
 満国境から札蘭屯附近まで約四〇〇軒をみるに比して距離半に過ぎない
 からである。

従つて第一期会戦を東正面に第二期会戦を大興安嶺方面に指導せんと
 する既述の案を採用する場合に於ても第二期会戦が實際西正面にて行
 はるるか北正面にて行はるるかは遽に断定し難く一九三七年度計畫以

後結氷期一概ね十月から三月まで一開戦の場合は北正面に、非結氷期七五一概ね四月から九月まで一開戦の場合は西正面に主力会戦を指導し得る如く計畫準備せられた。^約

しかし二月、三月開戦の爲にはシベリヤ鉄道の輸送力が最も低下する十二月、一月にソ軍は戦争準備を行うこととなり十月、十二月開戦の場合はソ軍の北滿平地進出に當り酷寒季に遭遇し戦果の擴張に適しな
いこととかる。果して然らばソ軍の攻勢は非結氷期に黒龍江を渡河し
来る公算多きものとして之に對する防勢の作戦準備を進めて来た。か
くて一九三八年には黒龍江の渡河可能の正面には彼我共に陣地を構築
し且渡河舟艇、河上砲艦等を整備して河川戰鬥の諸準備を進捗せしめ
黒龍江を挟んでの日ソ兩軍の緊張は東正面に劣らざるものとなりつ
つあつた。

東正面に於ては結氷期に至れば興凱湖及其の周邊の濕地帯が諸兵の行
動を許すこととなるので、ソ軍の陣地設備比較的薄弱にして且ウオロシ

ロフ方面の敵の退却を遮断し得るこの方面に主攻撃を指向することは就き研究せられた。そして一九三七年度以降の作戦計畫に於ては興凱湖方面のこの季節的特性を利用し得る如く作戦指導の考案に弾力性を附與せられた。

〔註二七〕ソ連人は日本人に比し極寒に堪へ得る能力が遙に大きいので當時に於ける日本軍の不十分なる冬期作戦準備を以て結果として冬期作戦を実施するのは困難なことであつたと考へられる。

考	備	總兵力	海上兵力 潜水艦數	航空兵力 飛行機數	地上兵力			兵力 年次
					戰車數	騎兵師団	狙撃師団	
		約三七万	六七	約一五六〇	約一五〇〇	三	二〇	1937
		約四五万	七五	約二〇〇〇	約一九〇〇	二乃至三	二四	1938
		約五七万	九〇	約二五〇〇	約二二〇〇	二乃至三	三〇	1939
		約七〇万	一〇三	約二八〇〇	約二七〇〇	二	三〇	1940

自一九三七年 概東ソ軍兵力変遷一覽表
至一九四〇年

一、本表の兵力は日本參謀本部の判断に基くものである。
 二、本表の兵力は各年次の年末頃のものを示す。
 三、飛行機數は部隊裝備數を示し練習機、輸送機、連絡機を含まない。
 四、潜水艦以外の海上兵力に就ては記録がない。
 五、總兵力は正規軍の外内務人民委員部の兵員を含むものである。
 六、本表の期間に左の如き事件があつた。

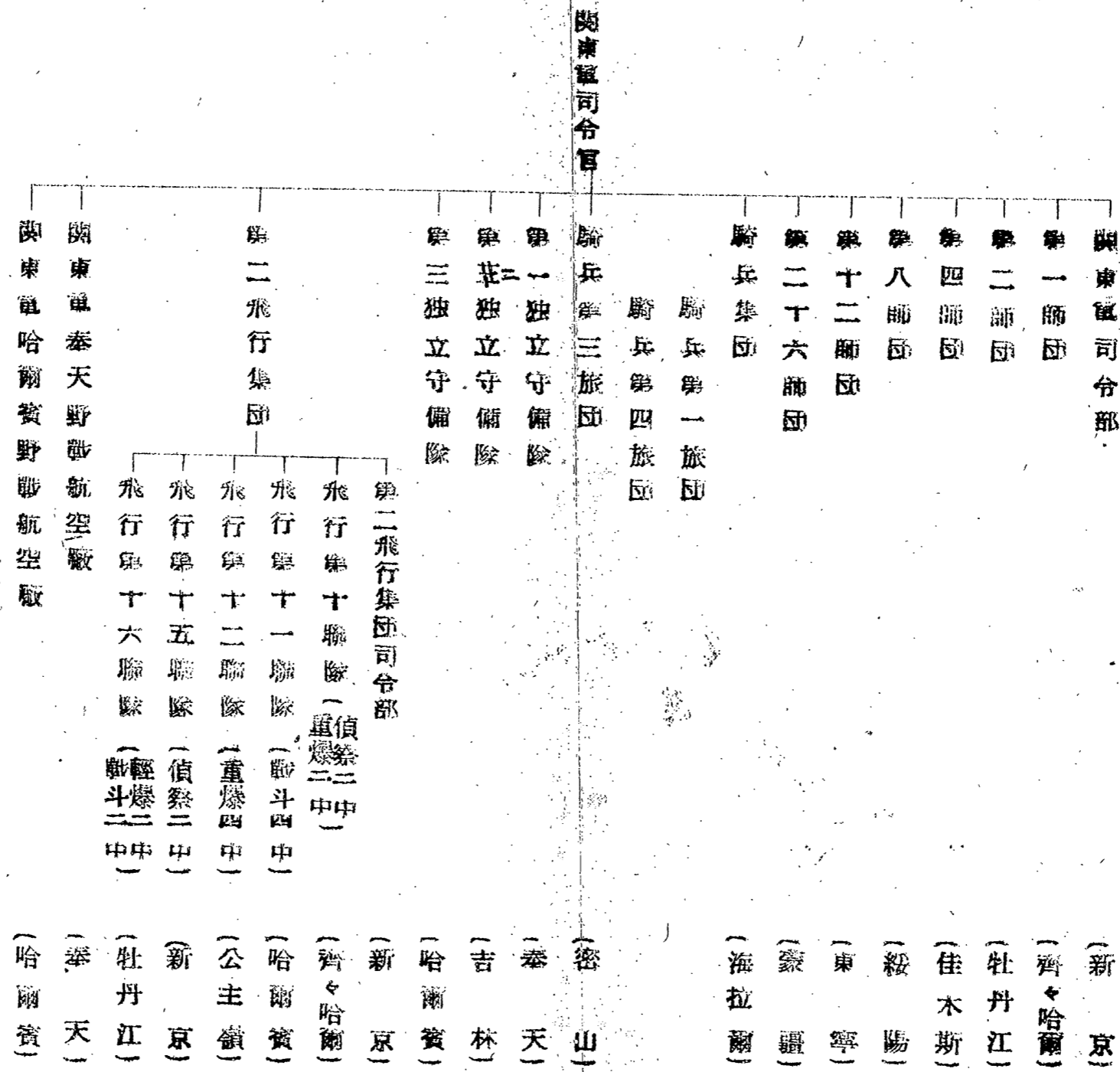
一九三七 乾岔子事件、日華事件勃發
 一九三八 張鼓峯事件
 一九三九 ノモンハン事件
 一九四〇 日ソ中立條約締結

自一九三七年
至一九四〇年 関東軍兵力変遷一覽表

考 備	航空兵力			地上兵力							兵 力 年 次	
	飛行 機 隊	飛行 集 団 司令部	航空 兵 団 司令部	独立 守 備 隊	駐 屯 隊	國 境 守 備 隊	旅 団	騎 兵 集 団	師 団	電 司 令 部		關 東 軍 司 令 部
一、本表の兵力は年末の兵力を示す 二、一九三七年師団六箇の中一箇は蒙疆に配置せられ満洲に於ける対ソ作 戦兵力とはならなかつた。この師団は一九三八年七月駐蒙軍に転属せ られた。 三、TKB 1 戦車旅団、KB 1 騎兵旅団を示す。	一	一		三			KB TKB 一 一	一	六		一	1937
		一		三	一	八	KB 一		八	二	一	1938
		一	一	九	一	八	KB 一		九	四	一	1939
		一	一	九	一	一三	KB 一		一 二	四	一	1940

附表第四其の二

一九三七年に於ける関東軍兵力配置表



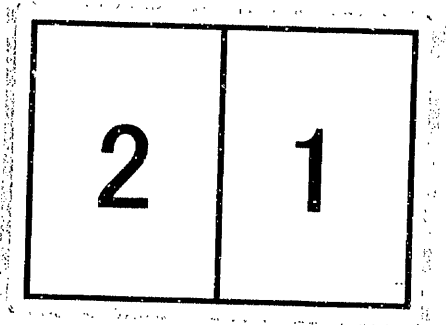
備考

一、本表の内容は一九三七年末に於ける状態を示す。
 二、第二十六師団は一九三七年十月関東軍司令官隷下部隊として蒙疆に新設せられ一九三八年七月駐蒙軍に転属せられた。関東軍司令官の隷下に在る間に於ても滿洲に於ける対ソ作戦兵力ではなかつた。

2600

0092

分割撮影ターゲット

分割した部分の撮影順序	
分割撮影した理由	A 3 版以上のため
文書等名	1940年に於ける関東軍兵力配置表
上記のとおり分割撮影したことを証明する。	

一九四〇年於付令關東軍兵力配屬表

關東軍司令部

第三軍司令部

第八師團

第九師團

第十二師團

第一獨立守備隊

第二國境守備隊

第三國境守備隊

第十一國境守備隊

第一戰車團

戰車第三聯隊

戰車第五聯隊

戰車第九聯隊

野戰重砲兵第四聯隊

野戰重砲兵第九聯隊

獨立山砲兵第十二聯隊

獨立山砲兵第十三聯隊

高射砲第十聯隊

高射砲第十三聯隊

高射砲第十七聯隊

第四軍司令部

第一師團

第八獨立守備隊

第五國境守備隊

第六國境守備隊

第七國境守備隊

第十三國境守備隊

高射砲第十一聯隊

第五軍司令部

第十一師團

第二十四師團

第二十五師團

第六獨立守備隊

第三國境守備隊

第四國境守備隊

第十二國境守備隊

第二戰車團

戰車第四聯隊

戰車第十聯隊

戰車第十一聯隊

野戰重砲兵第二十聯隊

野戰重砲兵第二十四聯隊

高射砲第九聯隊

高射砲第十八聯隊

第一丁兵隊

獨立丁兵第二十二聯隊

獨立丁兵第二十四聯隊

第六軍司令部

第二十二師團

第八國境守備隊

093

(新) 京

(掖) 河

(綏) 陽

(掖) 河

(東) 寧

(東) 江

(東) 丹

(綏) 芬

(鹿) 台

(鹿) 台

(愛) 河

(愛) 河

(東) 寧

(北) 安

(孫) 吳

(北) 安

(霍爾) 莫津

(瑛) 河

(黑) 河

(法) 別

(孫) 吳

(東) 安

(東) 林

(東) 安

(東) 安

(半) 河

(虎) 嶺

(廟) 安

(東) 安

(虎) 林

(雙) 德

(東) 安

(寶) 清

(佳) 木新

(海) 拉爾

(海) 拉爾

(海) 拉爾

(海) 拉爾

(海) 拉爾

(海) 拉爾

(海) 拉爾

(海) 拉爾

(海) 拉爾

(海) 拉爾

(海) 拉爾

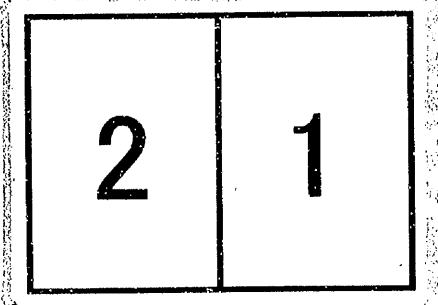
0093
0094

備考

一、本表の部隊号は戦力判断上重要なもののみ止め、その他を省略した。
 二、本表の内容は一九四〇年末の状態を示す。

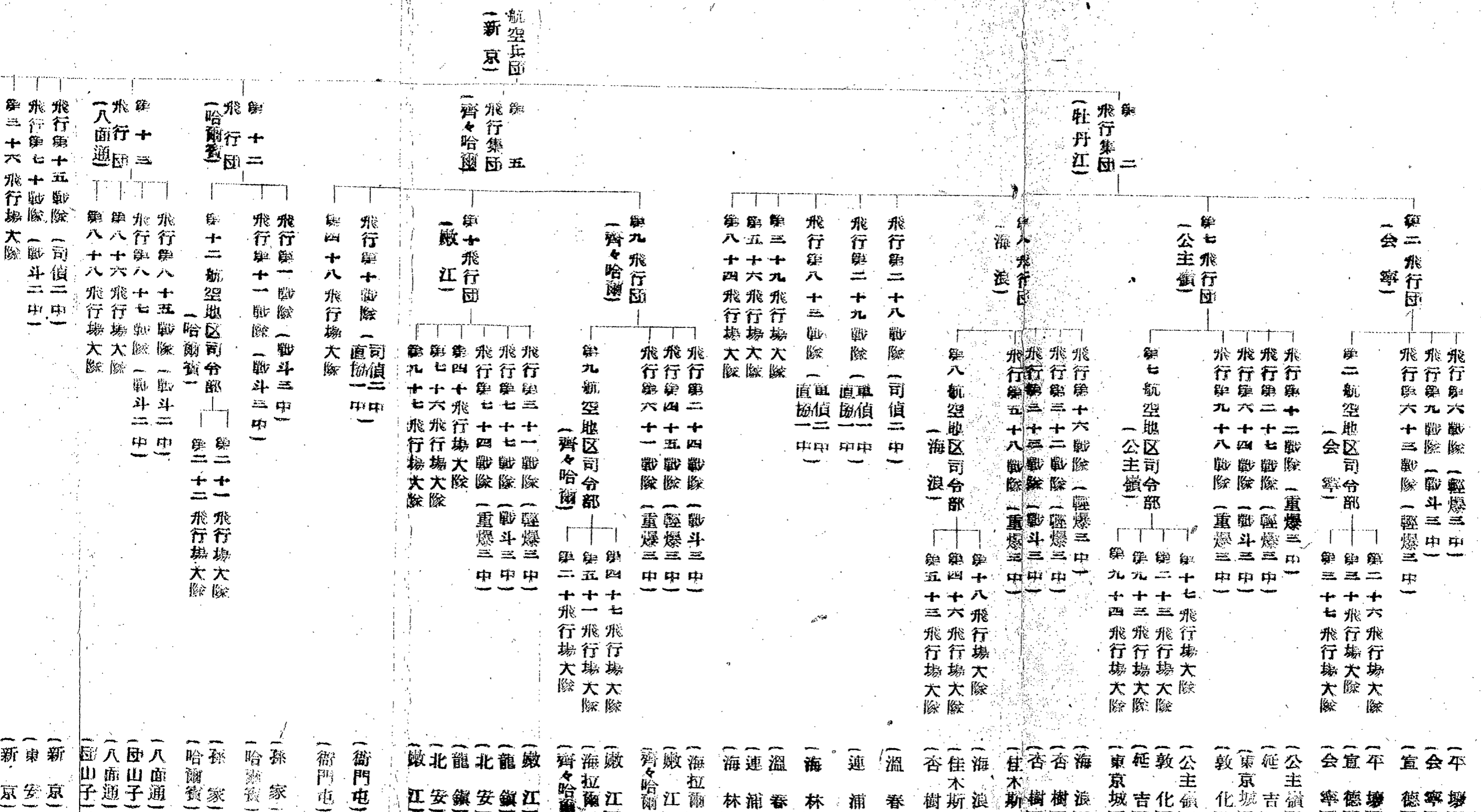
<p>第四軍</p>	<p>第一師団 第八獨立守備隊 第五國境守備隊 第六國境守備隊 第七國境守備隊 第十三國境守備隊 高射砲第十一聯隊</p>	<p>(北安) (霍爾莫津) (瑛河) (黑河) (法別) 吳 (孫吳)</p>
<p>第五軍</p>	<p>第五軍司令部 第十一師団 第二十四師団 第二十五師団 第六獨立守備隊 第三國境守備隊 第四國境守備隊 第十二國境守備隊 第二戰車師団 戰車第四聯隊 戰車第十聯隊 戰車第十一聯隊 騎兵第三旅団</p>	<p>(東安) (虎林) (東安) (廟安) (虎頭) (牛河) (東安) (林口) (東安) (寶清) (東安) (裴德) (虎林) (東安)</p>
<p>第六軍</p>	<p>第六軍司令部 第二十三師団 第八國境守備隊 野戰重砲兵第二十聯隊 輿重砲兵第二高射砲隊 高射砲第九聯隊 高射砲第十八聯隊 第一丁兵隊 獨立丁兵第二十二聯隊 獨立丁兵第二十四聯隊</p>	<p>(佳木斯) (海拉爾) (海拉爾) (海拉爾) (佳木斯)</p>
<p>第十師団 第七獨立守備隊 第十四師団 第二十八師団 第二十九師団 琿春駐屯隊 第九國境守備隊 第一獨立守備隊 第二獨立守備隊 第三獨立守備隊 第五獨立守備隊 第九獨立守備隊 輿重砲兵隊 興東軍砲兵司令部 野戰重砲兵第七聯隊 野戰重砲兵第二十二聯隊 阿城重砲兵聯隊 穆稜重砲兵聯隊 東寧重砲兵聯隊 獨立野砲兵第一聯隊 興東軍第一高射砲隊 高射砲第十二聯隊 高射砲第十九聯隊 獨立丁兵第五聯隊 獨立丁兵第二十七聯隊 迫撃第二聯隊 航空兵団</p>	<p>(佳木斯) (富錦) (齊齊哈爾) (哈爾濱) (遼陽) (琿春) (五家) (奉天) (新京) (昂溪) (哈爾濱) (承慶) (阿城) (東寧) (裴德) (阿城) (穆稜) (東寧) (成子) (下城子) (興源鎮) (穆稜) (詳細屬表)</p>	

分割撮影ターゲット

分割した部分の撮影順序	
分割撮影した理由	A 3版以上のため
文書等名	1940年に於ける関東軍航空部隊 配置表
上記のとおり分割撮影したことを証明する。	

一九四〇年に於ける關東軍航空部隊配置表

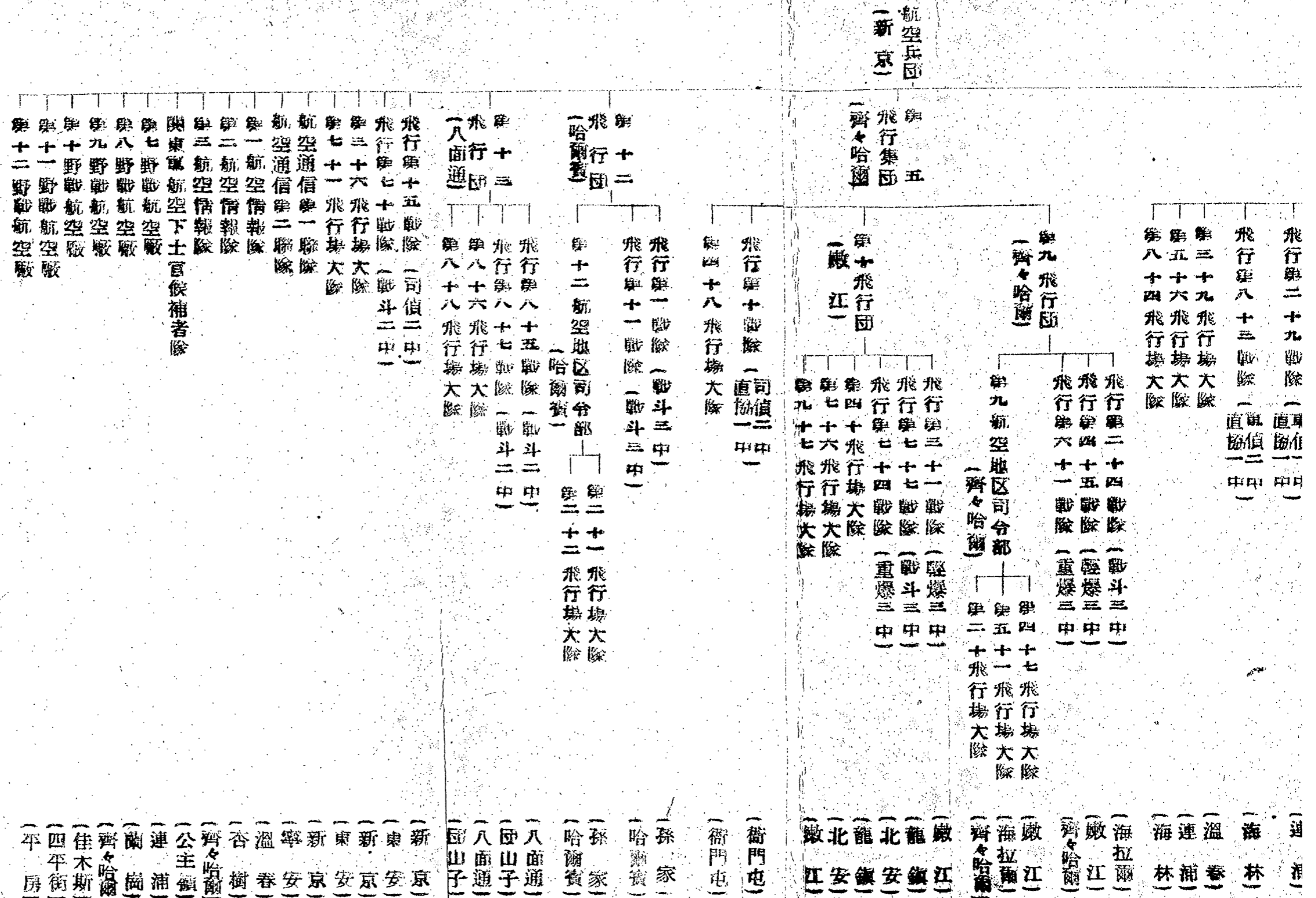
9600



0095
0096

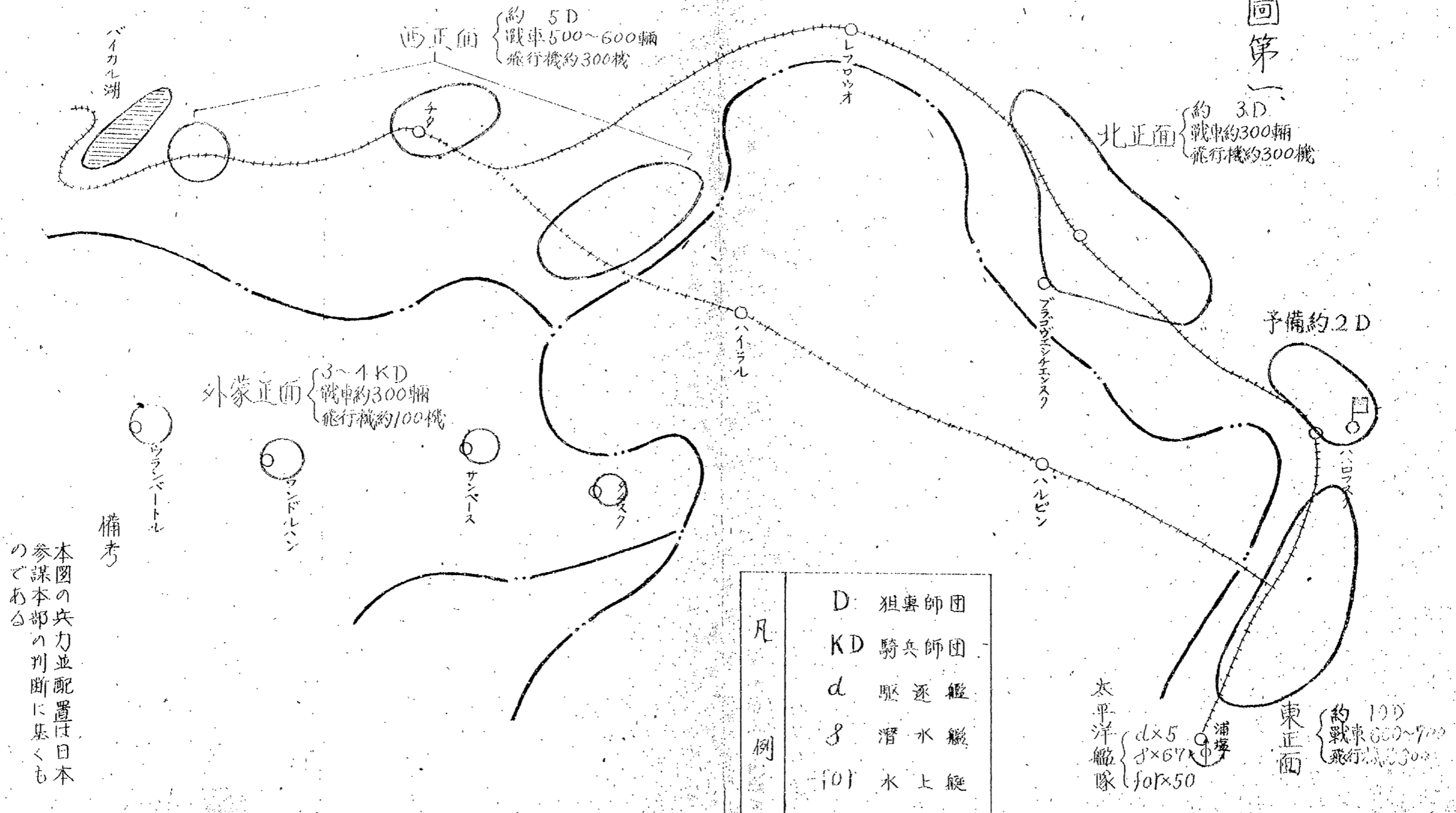
備考

本表の内容は一九四〇年末の状況を示す



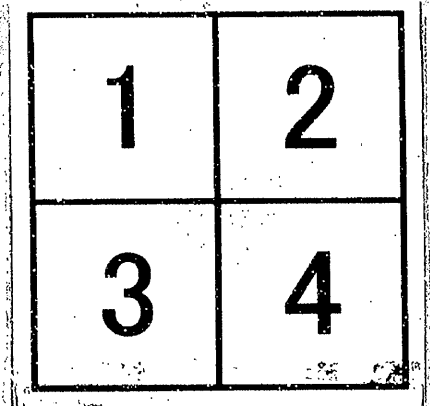
1937年に於ける極東ソ軍兵力配置圖

附圖第一



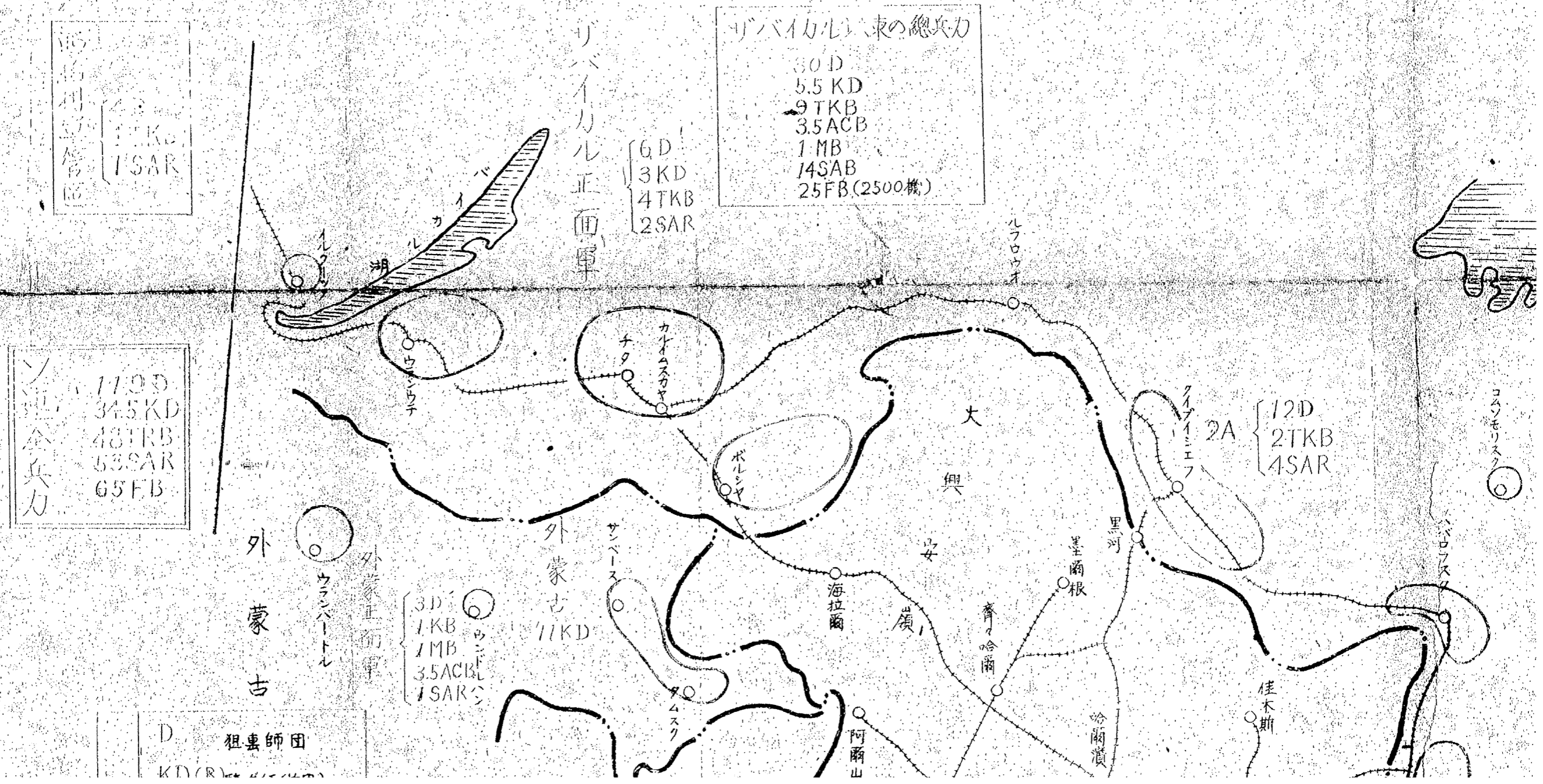
0097

分割撮影ターゲット

分割した部分の撮影順序	
分割撮影した理由	A 3版以上のため
文書等名	1939年に於ける極東ソ軍兵力配置図
上記のとおり分割撮影したことを証明する。	

0098
0099
0100
0101

1939年に於ける極東ソ軍兵力配置圖



1939年に於ける極東ソ軍兵力配置圖

附圖第二



ソ連軍兵力
1 SAR

60D
5.5KD
9TKB
3.5ACB
1MB
14SAB
25FB (2500機)

6D
3KD
4TKB
2SAR

ソ連軍兵力
119D
345KD
43TKB
53SAR
65FB

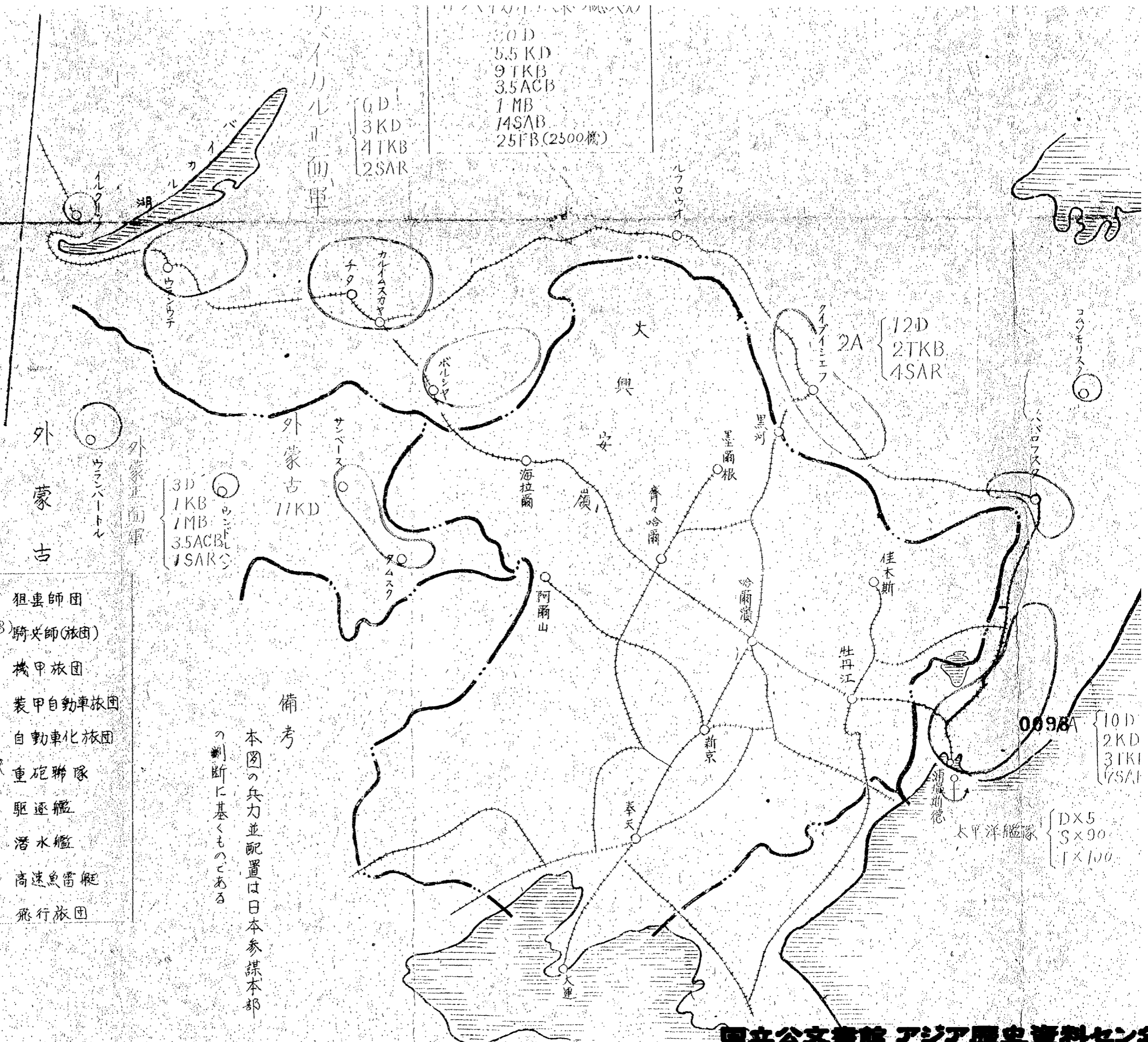
12D
2TKB
4SAR

3D
1KB
1MB
3.5ACB
1SAR

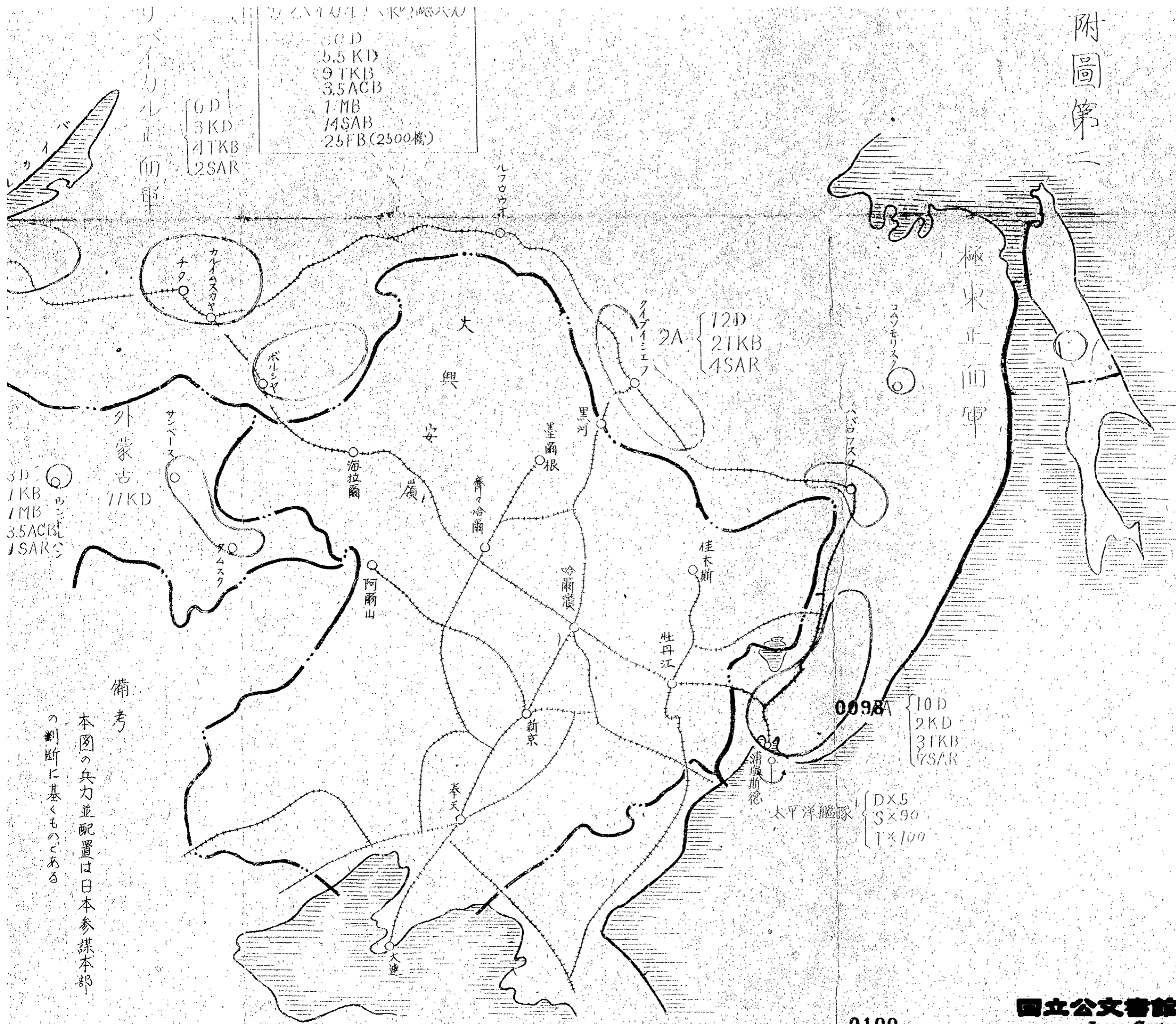
コソモリスフ

凡	D	狙撃師団
	KD(B)	騎兵師(旅団)
	TKB	機甲旅団
	ACB	装甲自動車旅団
	MB	自動車化旅団
	SAR	重砲聯隊
例	D	駆逐艦
	S	潜水艦
	T	高速魚雷艇
	FB	飛行旅団

備考
本図の兵力並配置は日本参謀本部
の判断に基づくものがある



附圖第二



備考

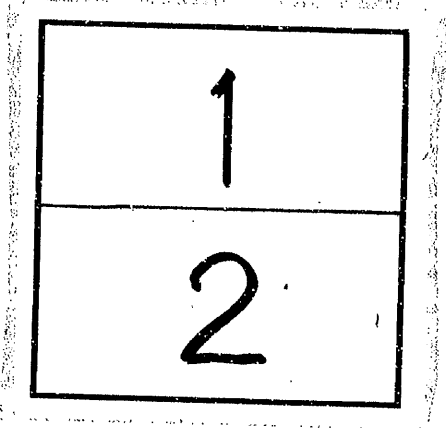
本図の兵力並配置は日本参謀本部の判断に基づくものである

0099

0098A

0100

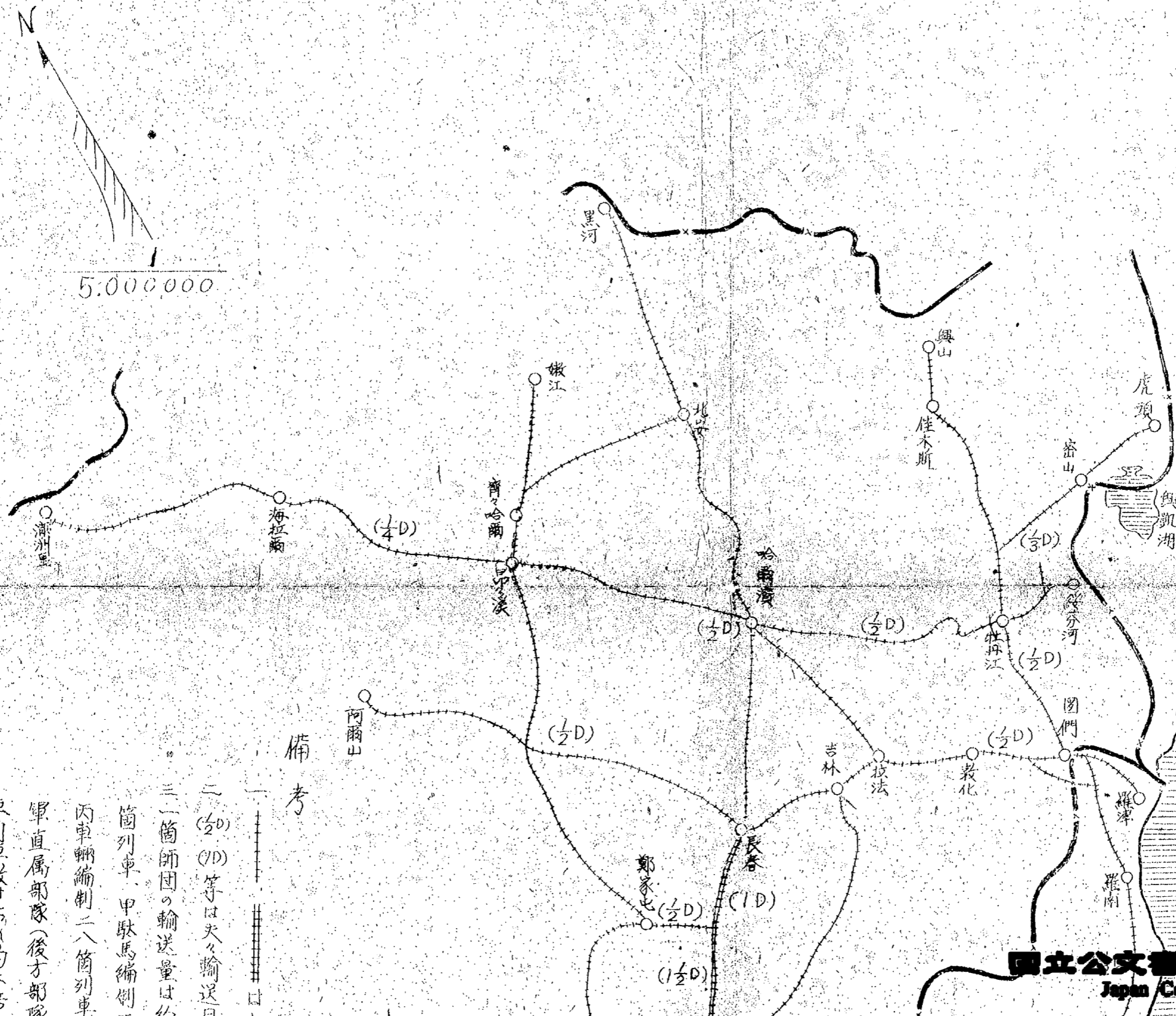
分割撮影ターゲット

分割した部分の撮影順序	
分割撮影した理由	A 3版以上のため
文書等名	1973年に於ける満洲鉄道図
上記のとおり分割撮影したことを証明する。	

0102
0103

1937年に於ける滿洲鐵道圖

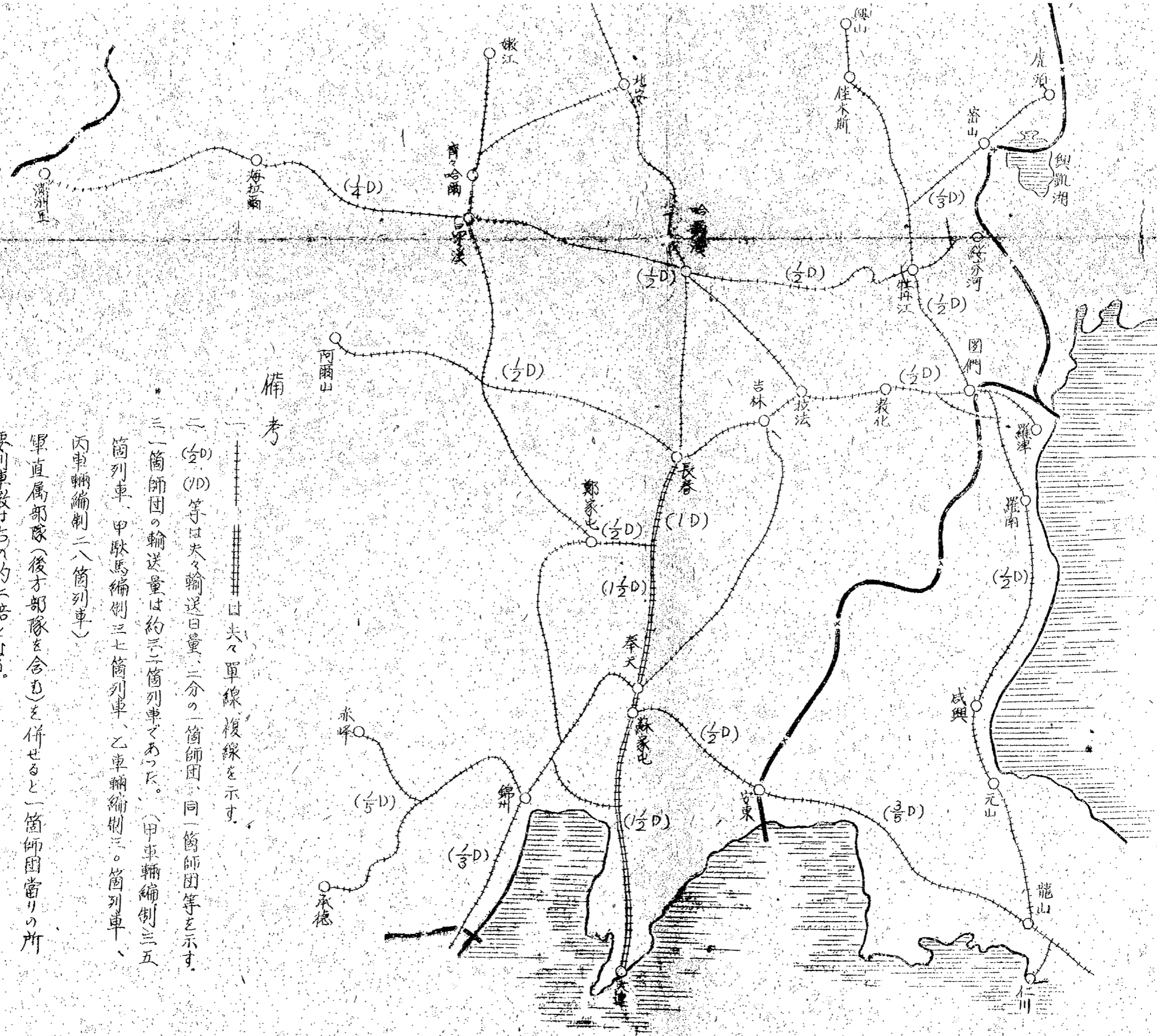
附圖第三



備考

一 (1/2D) 等は夫々輸送口
 二 (1/2D) 等は夫々輸送口
 三 一箇師団の輸送量は
 簡列車 甲駄馬編制
 丙車輛編制二八箇列車
 軍直屬部隊(後方部隊
 要列車數は右の約二倍

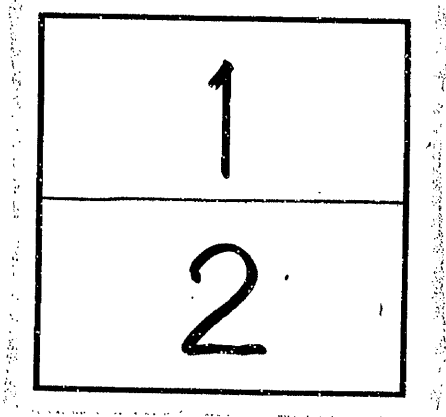
0102



備考

一、 $(\frac{1}{2}D)$ 等は夫々輸送日量、三分の一箇師団、同一箇師団等を示す。
 二、 $(\frac{1}{2}D)$ 等は夫々輸送日量、二箇師団の輸送量は約二箇列車であった。(甲車輛編制三五箇列車、甲馱馬編制三七箇列車、乙車輛編制三箇列車、丙車輛編制二箇列車)
 三、軍直屬部隊(後方部隊を含む)を併せると一箇師団當りの所要列車数は右の約二倍となる。

分割撮影ターゲット

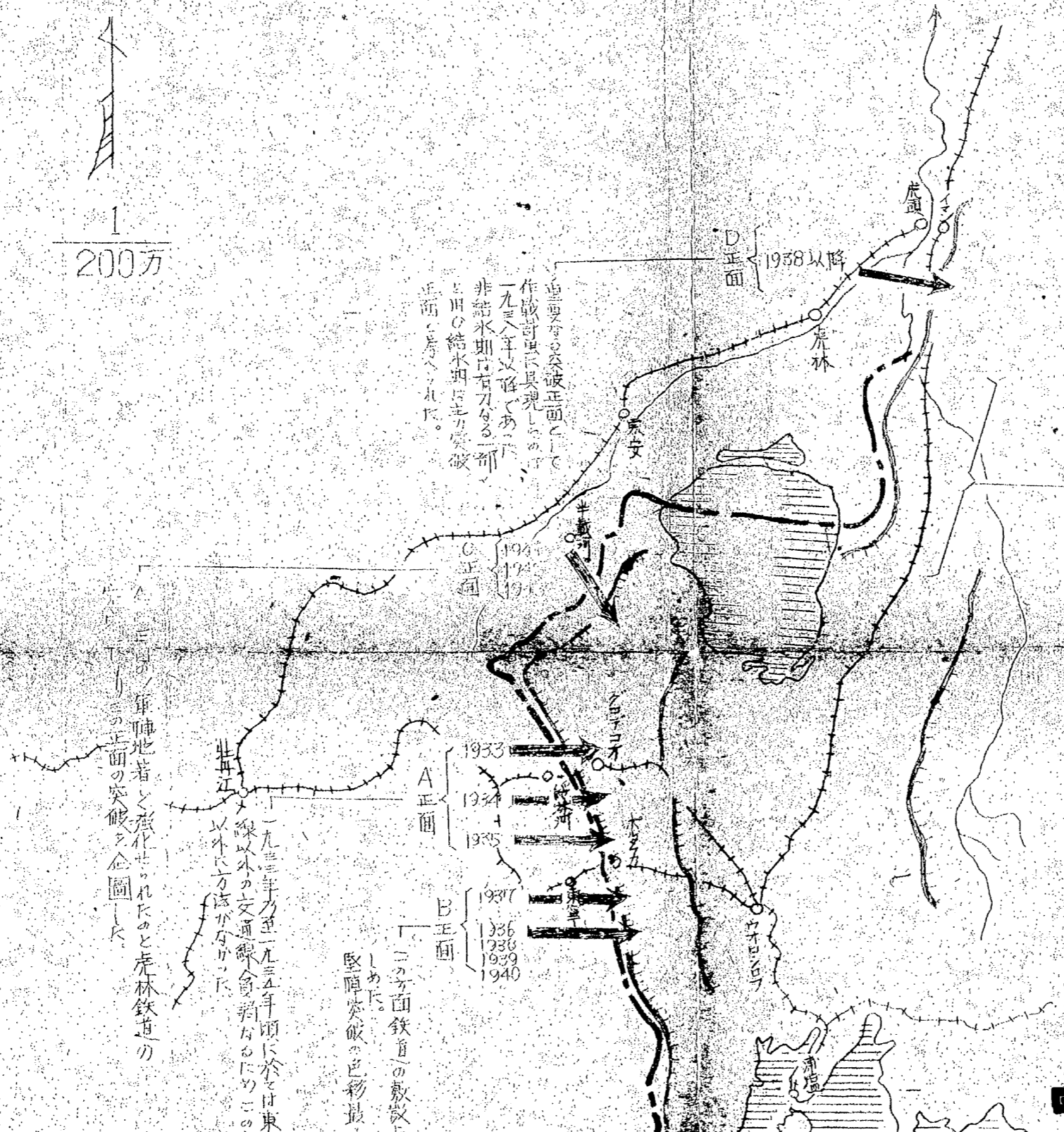
分割した部分の撮影順序	
分割撮影した理由	A 3版以上のため
文書等名	満洲東正面に於ける 日本軍突破正面変遷要図
上記のとおり分割撮影したことを証明する。	

0104
0105

滿洲東正面に於ける日本軍突破正面變遷要圖

附圖第四

1
200万



重要なる突破正面として
作戦計画に具現し、
一九三八年以降、
非結氷期は右方、
結氷期は左方、
正面を考へられた。

D正面
1938以降

C正面
1934
1935

A正面
1933
1934
1935

B正面
1937
1938
1939
1940

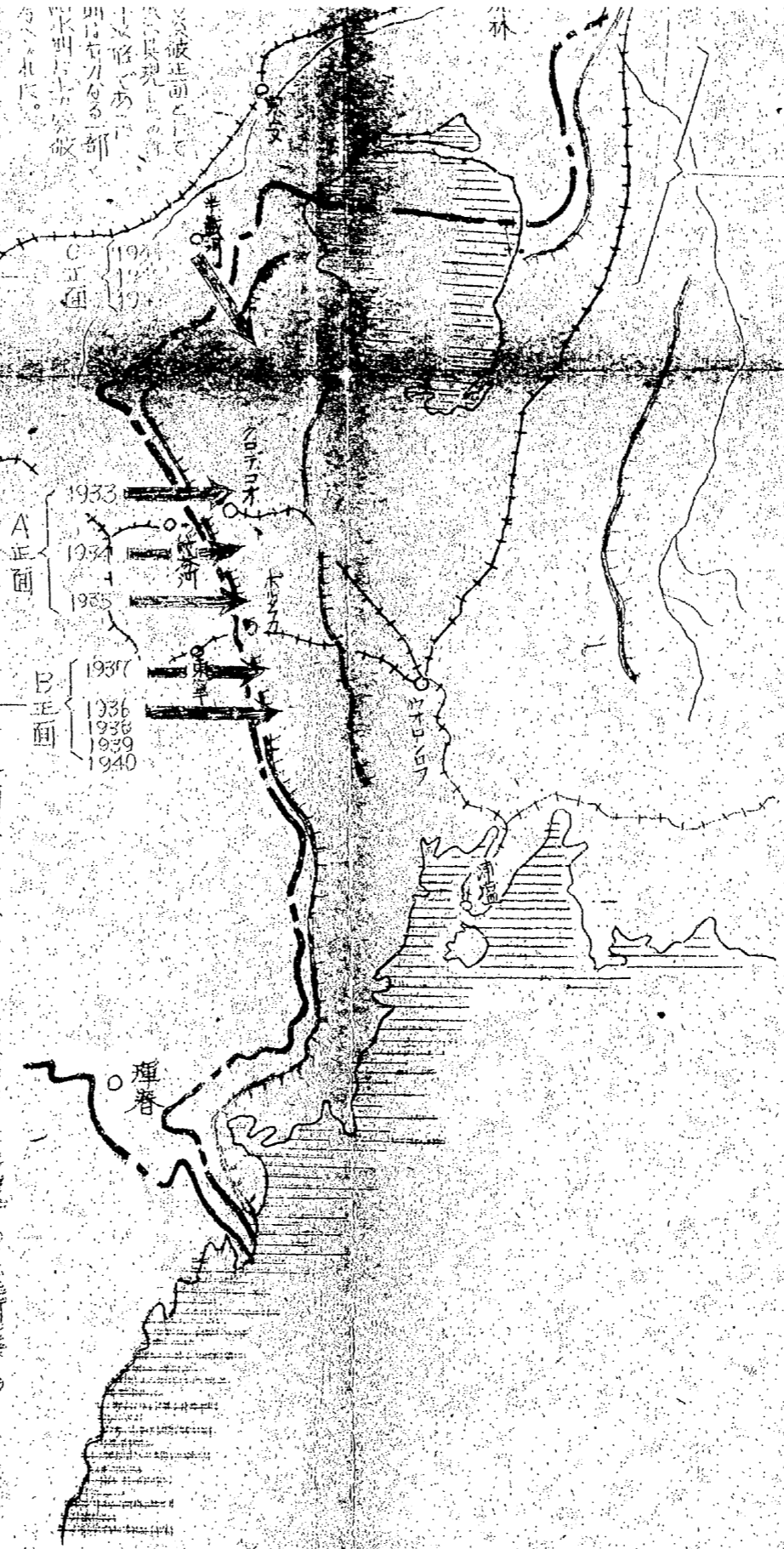
「この方面鉄道の敷設
しめられた。
堅固な破の色彩最

「一九三三年乃至一九三五年頃に於て東
北線以外の交通線全廃なるに於てこの
以外に方法がなかった。
A正面の軍陣地着と強化せられたと虎林鉄道の
突進の正面の突破の企圖」

C、D正面は戦略的に有利なる突破正面にて軍陣地は
接的容易なる地形上の困難があった。

0104

C面は敵の有利なる突破正面下で軍陣地は
被的撃たるゝ形勢上の困難があった。



この被正面として
は、其の突破の
目的を以て、
明瞭なる一部
を以て、
示す。

「二つの面(鉄道)の敷設より突破正面として選定するに
は、堅固突破の色彩最も濃厚なり、一九三七年の計画である。

一九三三年乃至一九三五年頃に於ては東支鉄道(牡丹江-綏芬河)沿
線以外に交通線が乏しく、この方面に突破正面を選定する
以外に方法がなかった。

「三つの軍陣地着と強化せられたのと虎林鉄道の
この方面の突破を念圖した。

備考

一 本図は附記年次に於ける外、作戦計画上の突
破正面を示す。

二 A B C D 正面は本圖上の解説に便からしめる
為に記したもので作戦計画上當時呼稱され
たものではない。